

## 附属図書館報創刊にあたって

森野能昌



もりの よしまさ  
熊本大学長，医博，  
生化学

本学は昭和24年新しい大学制度により総合大学として発足しました。旧制五高，師範学校，工業専門学校，薬学専門学校，医科大学などが統合された結果です。総合大学としては，図書館がひとつのキャンパスの中央にあり，いかにも大学のシンボルとしての風格を備え，その大学の教育研究の水準にふさわしい内容を備えることが理想です。しかし，本学では，その創設の経緯もあって，現在の附属図書館本館は，主として教育図書館の役割を果たし，本荘地区，九品寺地区にある分館が，それぞれ，医学，薬学の研究図書館として機能を果たしております。あと，黒髪地区の文科系及び理工系学部群のための研究図書館機能の統合充実を図る方策が検討課題として残されております。

人間が進化に成功して優れた能力をもつに至った理由は，文字と言語の発明です。これにより，複雑な事象も共通の文字により表現することができ，一天才のアイデアもその論文を通して万人が享受することができるようになり，人間は目ざましい速度で文化，文明を次々と創造するに至りました。人類の知能や文化の所産を共有する過程で，図書果たす役割は極めて大きいものがあり，学術の進展とともに図書館も姿をかえながら発展してきました。

現代は，各学問分野が互いに入り組み，発

展し，そこからまた新しい分野が生まれることにより，情報量も飛躍的に増大し，情報過多の時代となっております。現在までの膨大な学問業績から推し量って，例えば，これからの百年間に蓄積されるであろう学術情報量は想像できないほどに膨れ上がるでしょう。一方，情報科学技術の進展も急速であり，情報の貯蔵，検索などの技術が格段に進むことも予想されます。したがって，今後は，常に情報の保持，蓄積，提供，伝達の方法の改善の努力を重ねながら，将来に備えなければなりません。

蓄積された膨大な情報をいかに整理して有効に利用できるかは，利用者の一人ひとりが工夫してその方法を見つけるのが建前ですが，そういう利用者の立場をある程度想定して図書館関係者は，適切な助言指導できるよう研究の努力を続けることが大事です。専門分野によって，情報の種類，保存形態，従って提供の仕方もそれぞれに異なっておりますので，教官も学生に対して，膨大な情報の中で何が本質的なものか，何を切り捨ててもよいかを判断する方法を理解させることも必要でしょう。

図書館は多機能をもたねばなりません。学生の勉強の場と資料をあたえ，学内，学外の研究者のための資料提供，参考書，研究資料などの保存，整理など一定のスペースの確保だけでなく，情報化時代を迎えて，図書館の機能も形態も大きく変わってきます。国内の他大学との間に情報利用のためのネットワークも整備されつつあり，さらに将来は国際的なネットワークという時代も近付いているようです。また，今後は開かれた大学としての期待から，図書館は，社会人のリカレント教育など一般人のための生涯学習の場としても重要となります。これらの機能拡充のために

は、実績を挙げ、これを説得力として、財源を求めなければなりません。

このように、図書館は、大学における教育研究に不可欠のメディアとして、常に利用者との対話を通して適確にニーズを把握し、種々創意工夫をこらして、利用しやすい機能を備

えることが求められております。今回、図書館報が発刊されることは、誠によるこぼしく歓迎すべきことであり、これが利用者と図書館の間の対話と交流の場となることを切に願っております。

## 図書館の役割

### 黒羽 啓明



くろばね よしあき  
附属図書館長、工博、  
建築構造学

昭和25年と言えば、やっとうどんが自由販売になった頃です。その頃まで主食は配給制で、米やうどんは“米穀通帳”を出さないと売って貰えないことになっていました。この年に私は大学に入学しました。

教養部の学生は旧制高校の校舎で授業を受けましたので、図書館も高校時代のものをそのまま利用していました。木造の小さい建物の二階が閲覧室で、窓から手のとどくほどの近さにある木の葉が太陽の光をチラチラと反射しながら揺れていた光景を、今も思い出します。この閲覧室は、学生の談話室のような働きをしていました。ここで、弁当を食べたり、他学部の学生と雑談をしたり、デートをする奴も居ました。

当時、開架方式をとる図書館はまれで、本は借り出して家で読むのが普通でした。私も、教養部図書館を利用して数多くの小説を読みました。昔の本には伏せ字がありました。若い人には想像できないでしょうが、モーパッサンの「女の一生」にさえ伏せ字がありました。母さんの散歩道のくだりは、勿論、×××

であったと思います。止むなく「女の一生」の原本を借り出したところ、伏せ字に該当する部分だけが真っ黒に汚れておりました。昔の高校生はこうしてフランス語の勉強をしたんだな、と感心しました。

その後、歳を経るに従って周辺が忙しくなり、図書館から小説を借り出すことは皆無となりました。現在、もし図書館長という職に就いて居なければ、自ら図書館へ赴くことは年に数回しかなく、たとえ赴いたとしても、せかせかと駆けつけて極めて実利的な情報の断片を探すのがせいぜいであろうと、容易に想像することができます。図書館に行かなくても、研究室は情報の洪水です。この洪水に押し流されないで、うまく餌を取る魚が太るわけです。したがって図書館の第一の使命は情報の管理にあります。各種各様の魚に最も適切な餌を準備する仕事です。研究者や学生を魚にたとえて申し訳ありません。

昨年5月に私が図書館長に選ばれて当惑していた時に、「情報管理は工学部の先生が一番得意な仕事じゃないですか」と私を励ましてくれた同僚が何人も居ました。しかし大学図書館にはもう一つの重要な使命があります。それは文化の保存と提供です。文明とは金になるもの、文化とは金に無関係なものと、私なりに定義します。その文化とはほど遠い日常・研究生活を送ってきた私にこの様な使命が担えるのかと言う疑問が未だ晴れないでいます。私が教養課程に在学していた時には生活は誠に貧しかったけれども、豊かな思い出